

北海道の文化や自然を全国に発信してきた隔月刊誌『カムイミシタラ』誌が今年の一月号(通巻百二十号)をもって第一期の区切りとして休刊した。同誌の「ずいそう」欄に執筆を依頼され、創刊号に「晴耕雨解」、最終号に「サッポロバレーの二十年」を二十年の間において書いている。誌名の「カムイミシタラ」とはアイヌ語で「神々の遊楽庭」の意味で、大雪山系の別名でもある。りんゆう観光の植田英隆社長が北海道の風土に根ざした文化誌を、という熱意で発刊し、これまで続いて来た。他企業の広告もほとんどなく、自社の宣伝誌くささもなく、北海道の風土・文化誌を自指すところが誌面から伝わってくる。

最終号の「ずいそう」にも書いたけれども、同誌の創刊の一九八四年と同じくして、筆者も「知識情報処理研究振興会」を立ち上げ、機関誌『いんふおうえいぶ』を発刊している。印刷会社は『カムイミシタラ』誌と同じアイワードである。筆者の方は一九九五年、通巻四十五号をもって

## 魚眼図

### カムイミシタラ

終わっている。筆者一人で原稿書きと原稿集め、経理から発送までやっていたから、十一年間続いたのは大したものだと自分ながら思っている。

同じ印刷会社だったので、『カムイミシタラ』の出版経費を聞いてみたことがあるけれど、筆者の機関紙とは桁が違っていた。企業という組織が出版しているとは言え、商売にあまり貢献するとは思えないこの種の出版を続けて来たのは、やはり大変な努力だったろうな、と一時期は同業者(?) だった者としては感じ入っている。

経済と文化を乱暴な区別で言えば、前者は仕事を作ってお金を稼ぐこと、後者はお金を使って価値観に合うものを創り出すこと、とでもなるか。『カムイミシタラ』は前者と後者をつないだ存在であって、同じ企業で育てていくのは難しい。でも、その難しさに再挑戦が行われることを期待したい。

(青木由直・北大教授 | 情報メディア工学)